

英語模擬授業における「振り返り」の実証的研究

—内省の深化に焦点を当てて—

生 内 裕 子

Hiroko HAENOUCHE. Practical Research on 'Reflection' for Fostering Metacognition in Pre-service English Teacher Education. *Studies in International Relations*. Vol.42, Consolidated Edition. February 2022. pp.115-123.

Reflection has consistently attracted attention in teaching and teacher education. By introducing the ideas of framing and reframing, Schön (1983) made the point that reflection is so much more than merely looking back on an experience or seeking a solution. In particular, reflection is recognized as a key to promoting metacognition because both the learner and the teacher can understand the learner's perception and transformation from the description of reflection in the learning process.

The purpose of this study is to examine students' retrospective descriptions on their trial teaching classes by both quantitative and qualitative analysis. Through the analysis, this research attempts to investigate the differences between the two groups: higher-performing and lower-performing in their trial teaching, comparing their retrospective descriptions. First, attempts have been made to visualize students' descriptions by text mining. Results indicate that there is little difference between the two groups in the frequency of word use and the co-occurrence network. The results of qualitative content analysis, however, reveal that there is a clear difference between the two. More students in higher-performing group tend to follow certain metacognitive development patterns than those in lower-performing group.

1. はじめに

近年の大学教育では、「教員が何を教えたか」という知識の伝達から「学生が何を学んだか」という学習への転換が叫ばれ、主体的学びの実践やアクティブラーニングなどの普及と併せて、学習者自身の振り返り活動の重要性が高まっている。とりわけ、将来教師になることを目指す教職課程履修中の学生にとっては、教師として成長を続ける上で、授業内での自分の模擬授業に対して振り返り活動を継続的に行うことは不可欠である。

振り返りは、「省察（せいさつ・しょうさつ）」や「内省」とも呼ばれており、英語を用いてリフレクション（reflection）と表記される場合もある。振り返りの定義として、三宅（1997）は、「自分のやり方を自分であれこれ検討してみること、もっと良いやり方はないか工夫してみること、自分に対

して批判的になること」と述べている。さらに「学習者が自らの学習について意図的に吟味するプロセス、獲得した認知的技能や知識をデータとして新たな技能・知識を作り出す批判的思考力（三宅・白水，2002）」と定義することもできる。教職課程履修中の学生においては、自らの英語の模擬授業体験を客観的に見つめ直し、傾向や問題点を検討し、改善策を考え、その改善策を次の模擬授業で実行に移すという一連のサイクル（PDCA）において、上記の振り返り活動の果たす役割は大きい。

本研究では、「英語科教育法」の授業において学生が自らの模擬授業を振り返ってまとめた期末レポートの内容を、2つの異なる方法で分析して考察した後、模擬授業評価^{注1}の上位グループと下位グループの違いを見ていく。最初に「計量テキスト分析（テキストマイニング）」を用いた量的分析

を実施し、両者の大まかな傾向を比較する。続いて「テーマ分析」を用いて記述内容の質的分析を行うことで、2つのグループ間の共通点や相違点を明らかにし、振り返り活動の有効性を高める指導方法を考えていく。

2. 振り返り活動とメタ認知

2.1 アクティブラーニング型授業と振り返り

「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」という答申(文部科学省, 2012)以降, 大学では教育の成果を可視化することが求められ, アクティブラーニング型授業も導入されている。アクティブラーニング型授業においては, 学生が学習活動に積極的に参加することが求められる。しかしながら, 積極的に参加するだけで, スキルや能力が自然に身につくということではなく, 常に自らの学習を振り返り, 自己評価することが必要である。授業において何を学び, 学んだ内容がどのような形で自分の今後の学習に応用できるのかという視点での振り返りの反復は重要であると言える。

Fink (2013) は, アクティブラーニングの構成要素として, 2つの要素—経験 (Experiencing) と振り返り (Reflection)—を挙げている。大学教育において, 学習内容の振り返りは重要な概念であると言えるが, アクティブラーニングなどの教授法の導入が先行する一方, 振り返りにはあまり重点が置かれておらず, その効果の検証が不十分であるという指摘もある(和栗, 2010)。

図1 アクティブラーニングを促進する活動例

経験 (Experiencing) • 活動: 学習者が実際に参加する学習活動 実験, 調査, ディベート, プレゼンテーション, ロールプレイなど • 観察: 学習する内容を「見たり」「聴いたり」すること 専門家や教師のデモンストレーションを見ること, ビデオの視聴など
振り返り (Reflection) 「何を」「どのように」学習したのかを意識する • 自分の経験と学びをまとめたレポート (一人で行う振り返り)

・クラスでのディスカッション
(他者と一緒に行う振り返り)
他者との協働によって振り返りが促進される

(Fink (2013) p.120, Exhibit 4.1 に基づく)

教員養成課程における経験には, 「英語科教育法」の授業中に自身が実施する模擬授業や教育実習校での授業体験が含まれ, 加えて, 他の学生の模擬授業や現場の教員の授業を観察することが含まれる。学生は, その都度, 自身の教育活動を記録し, 振り返りや改善を行うことになる。

Moon (2004) は, さらに学びを促進するための継続的振り返りの効果として, 以下を挙げている。

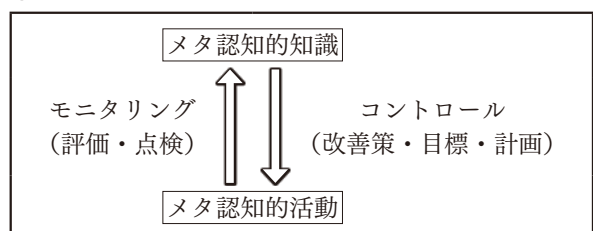
- 知的な余地を拡大させ, 学習ペースに余裕を持たせる。
- 学びの当事者であるという意識を高めさせる。
- メタ認知 (metacognition) を促す。

3番目のメタ認知とは, 自らの学びのプロセスや克服すべき課題を認識し, それらの知見を次回以降の経験 (ここでは模擬授業や教育実習での授業) に活かすことができる能力である。常に授業の改善が求められる教員養成課程の学生にとって, 振り返り活動の最も重要な目的は, このメタ認知の向上にあるとも言える。

2.2 メタ認知

「メタ認知」とは認知に対する認知, すなわち見る, 聞く, 話す, 書く, 理解する, 考えるといった通常の認知活動をもう一段高いレベルからとらえた認知をさす。メタ認知は, 知識 (メタ認知的知識) と活動 (メタ認知的活動) の二つに分けられ, メタ認知的活動は, モニタリングとコントロールの二つの働きを持っている (図2)。

図2 メタ認知モデルと振り返り



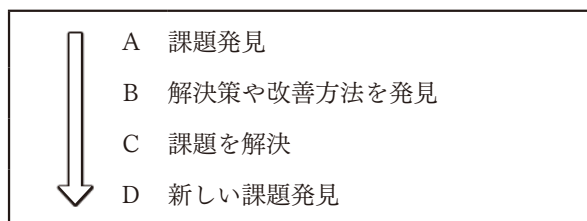
(Nelson, 1996 に基づく)

自分の活動を振り返って記録する行為は、学びの状況を客観視（メタ認知）し、その意味を考え、今後活かす方法の見通しを持つことに直結する。例えば、学習者が自らモニタリングすることにより、「これまではテストで問題に急いで答えていたので読み間違いが多かった。」と気づいた場合、自らコントロールして「次回は焦らず冷静に取り組み、問題文をよく読もう。」などの具体的対策を考え実行するなど、モニタリングとコントロールは密接に関連して機能する。モニタリングした結果に基づいてコントロールを行い、コントロールの結果をモニタリングし、さらにコントロールを行うというように、両者は循環的に働き、メタ認知のレベルを上げていくと考えられる。

特に教職課程の学生の場合は、自ら実践した授業の記録の蓄積と、それをを用いた自己評価との親和性が高い。振り返りレポートの作成は、学生が自分の指導技術演習（＝活動）の内容を細かい部分（＝行為）に分割し、具体的に振り返り、次の授業に向けた改善課題の発見へと導く効果を持つ。さらに、大学卒業までを通して振り返り活動を継続し、その記録を蓄積することにより、メタ認知の向上につながる効果的な指導も可能になると考えられる。

山本・臼倉 (2018) によると、メタ認知は次のように深化していく。

図3 メタ認知の深さ



Bの段階では、「自らの経験から意味を取り出せているか」どうか、そしてCの段階では、「達成理由を自己分析できているか」どうかが必要となる。言うまでもなく、メタ認知育成のためには教員の適切な支援が必要である。単に振り返りレポートを評価するだけではなく、深化のモデルに基づいて各学生の振り返りレポートを分析し、それぞれの記述がより上位の段階に移行するように指導し、

指導の効果を検証していくことが求められている。

3. 英語科教育法の授業

英語教員養成課程における履修科目のうち、「教科及び教科の指導法に関する科目」には英語学、英語文学、英語コミュニケーション、異文化理解、各教科の指導法の5種類がある。そのうち最後の指導法には「英語科教育法I～IV」の4つの授業が属しており、すべての科目が必修となっている。つまり、学生は基本的に2年生と3年生で2科目ずつを履修し、それぞれの授業で模擬授業を実施する機会が与えられるということになる。今回の調査対象大学における履修内容と概要は以下の通りである。

英語科教育法I—英語教育の背景知識と教育方法を学び、指導案の基本的書き方を身につけ実践する。

英語科教育法II—中学校の英語教科書を使用し、指導案を作成して模擬授業を実施する。

英語科教育法III—高等学校の英語教科書を使用し、指導案を作成して模擬授業を実施する。

英語科教育法IV—ティーム・ティーチングの基本概念を学び、英語ネイティブ教員とともにティーム・ティーチングによる模擬授業を実施する。

上記英語科教育法の授業内で実施する模擬授業の長さや回数は、受講者数によって異なっている。

4. 調査1（量的分析）の概要と結果

4.1 調査対象と方法

2018年度から2019年度に、筆者の担当した「英語科教育法I～III」を履修した日本の私立大学の学生19名が「英語科教育法」授業の終了時に提出した振り返りレポートを分析対象とした。続いて、19名を模擬授業の成績で3つのグループに分け、そのうち上位グループ6名（＝以下Aグループ）と下位6名（＝以下Cグループ）を比較した。比較に際しては、多量なデータから有益な情報を引き

出すテキストマイニングという方法を用いた。データに統計処理を行いそれを可視化することにより、総単語数、単語出現頻度と共起表現を比較した。共起表現（共起ネットワーク）とは、文章中に出現する単語の出現パターンが似たものを線で結んだ図である。出現数が多い語ほど円が大きく、また、共起の程度が強いほど太い線で結ばれる。

4.2 結果と考察

まず、総単語数や文の数などの基本データを比較した（図4）。Aグループの方が単語数や文の数が多いことが分かるが、一文における平均単語数に大きな差は見られなかった。

図4 振り返りレポートの概要

グループ	総単語数 (語)	文章数 (文)	単語／文 (単語)
A	9168	254	36.1
C	7312	205	35.7

単語の出現頻度は、図5のようにワードクラウド^{注2}として描かれる。実際は名詞、動詞、形容詞について分析したが、動詞は「できる」「思う」「感じる」など、また形容詞は「多い」「難しい」「良い」などのように、特徴的な単語が見られなかったため、図6では名詞のみの比較を示す。

図5 ワードクラウド（Aグループの例）

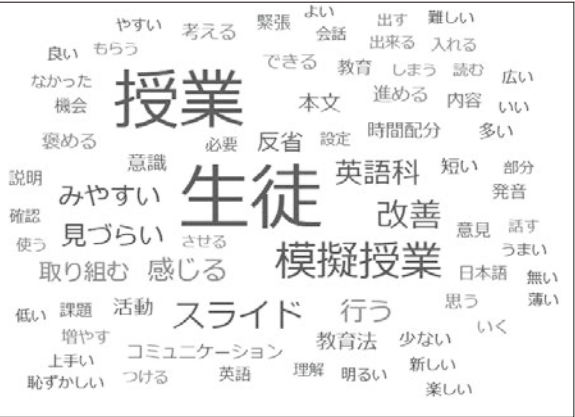


図6 名詞の出現頻度比較（上位6位）

	Aグループ		Cグループ	
	単語	出現頻度	単語	出現頻度
1	授業	87	授業	67

2	生徒	72	生徒	43
3	改善	39	模擬授業	34
4	模擬授業	36	改善	24
5	活動	21	必要	18
6	説明	18	英語科	17

図6から分かるように、2つのグループ間で使用単語やその頻度に大きな差はなく、上位4位までの単語は全く同じであった。実際に図5を見た学生からは、「要素は伝わってくるが、単語が独立している印象」「単語同士の関係性がわからない」といった意見があった。単純な頻度比較では、記述内容の正確な分析や比較は難しいことが分かった。

しかしながら、両グループの学生が授業を振り返り、「生徒」や「活動」について、あるいは自分の「説明」について内省し、次の授業に向けての「改善」策を考えてレポートを作成したことは、単語の出現頻度から容易に推察できる。

最後に共起表現を比較した。図7と図8は、抽出語の共起ネットワークを示している。

図7 Aグループの共起ネットワーク

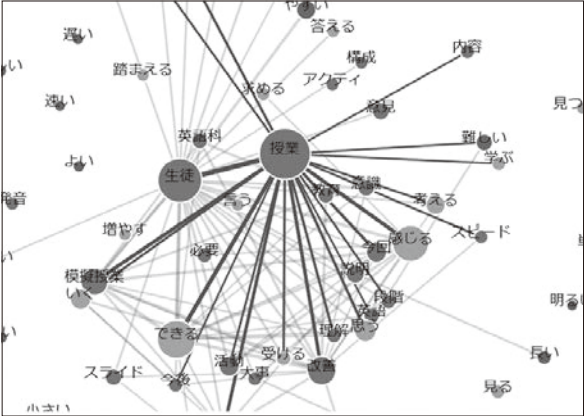
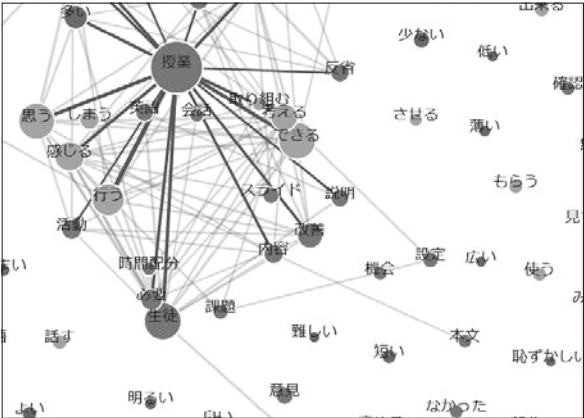


図8 Cグループの共起ネットワーク



このうち特に結びつきが強かった語を抽出しグループごとに示した（図9）。

図9 共起表現比較（上位5位）

Aグループ			Cグループ		
	共起表現	回	共起表現	回	
1	授業－生徒	42	授業－行う	30	
2	できる－生徒	28	できる－授業	26	
3	できる－授業	28	授業－生徒	25	
4	授業－改善	21	できる－模擬授業	16	
5	できる－模擬授業	20	授業－模擬授業	16	

分析対象が英語模擬授業の振り返りレポートであるため、当然ながら、「授業」「生徒」という単語が中心となり、さまざまな語との共起関係を示している。実際の共起ネットワークでは、各品詞が異なる色で表示されるため、品詞間の共起関係も把握しやすい。学生からは、「単語のつながりやその頻度が一目でわかって理解しやすい」という意見がある一方、「つながりを示す線が多くて複雑すぎる」とのコメントもあった。

テキストマイニングを用いた量的調査では、両グループ間で顕著な違いは見られなかったが、学生の振り返りの文章の傾向を客観的に示すことができたことには意味があると思われる。では、2つのグループにおける振り返り記述には全く違いがないのだろうか。この点を確認するため、次章では質的分析を行い、メタ認知の深さとの関連を考察していく。

5. 調査2（質的分析）の概要と結果

5.1 調査対象と方法

対象は調査1と同じである（4.1参照）。調査2では、19名の振り返りレポートをテーマ分析を用いて文章レベルで調査し、その後グループAとグループCの学生の記述内容をメタ認知の変化に焦点を当てて比較した。

テーマ分析とは、質的内容分析（qualitative content analysis）^{注3}とも呼ばれ、質的研究で広く用いられている方法である。テキストデータの中から重要なものとして浮かび上がってくるテーマ

を探索することを目的としている。この分析方法により、学生の振り返りレポートを詳細に読み込み、履修生の記述内容からテーマを探索的に見出し、そのつながりのパターンを確認することができる。

5.2 結果と考察

学生は、「英語科教育法I」の授業で初めての模擬授業を経験して課題を発見し、振り返りレポートで解決方法を考える。続く「英語科教育法II」では、前回考えた解決策を実践し、その成果について振り返る。そこで新たな課題、あるいはより良い改善策を考えるというサイクルが、最も望ましい深化の型である（図10）。

振り返りシートを利用して、授業後に児童生徒の理解度や認知レベルの変容を調査した研究には、メタ認知を高める最後の段階として「一般化」（特定の問題からの類推）を含めているものもある（重松・吉岡，2012）が、本稿の分析では前述した4段階で考察を進めていく。

図10 メタ認知の段階

メタ認知の段階		I	II	III
A	課題発見	↓		
B	課題の解決法や改善策の発見	↓		↓
C	課題解決と自己分析		↓	↓
D	新たな課題の発見		↓	↓

* 図中のI～IIIは「英語科教育法I」～「英語科教育法III」を示す（図11～13も同様）

振り返りレポートをテーマ分析し、それぞれのテーマのつながりを探索した結果、大きく3つの型があることが明らかになった。これらを「成長型」「独立型」「深化型」と名付けた。振り返り記述文の多くは独立型に属しており、深化型に属する記述は最も少なかった。

まず「成長型」であるが、図11に示したように、文型指導とその定着というテーマに関して、課題発見→継続→解決方法という流れで、3つの授業の振り返り内容が繋がっている。1年半という長期間での模擬授業体験があったからこそその振り

返り内容であり、記述内容には各段階を経ての成長が示されている。「一度聞いてだけで身につく生徒はいない」の部分では、経験から意味を取り出すことができている。また、課題解決においては、パターン・プラクティス^{注4}の導入が解決の理由であるという自己分析ができている。

図11 成長型：課題発見→課題継続→解決方法

I	課題発見	基本構文を繰り返し、生徒に定着させることが必要だと思った。
II	課題継続	一度聞いてだけで身につく生徒はいないので、何度も繰り返し聞かせる、言わせることで定着させなければいけないと思った。
III	解決方法	文型指導の際、パターン・プラクティスを取り入れることにより、授業をテンポよく進めることができるようになった。生徒に何度も問いかけたり、クイズ形式にするのも良いと思う。

2つ目は「独立型」である（図12）。それぞれの授業において、自らの経験や他の学生からのアドバイスに基づいて課題を発見し、改善策を提示できている。しかしながら、テーマには継続性が見られず、改善策の達成結果についての自己分析は全く行われていない。メタ認知レベルのさらなる向上を図るためには、テーマを設定して継続的に取り組むことと同時に、結果とその理由についても自己分析するよう指導していく必要がある。

図12 独立型：課題発見→解決方法

I	課題発見	今回の授業では、説明のために黒板に絵を描いたが、生徒にノートを取らせてしまった。それは時間を要するほか、ノートを見直しても絵だけでは意味がわからない。見直した時に重要な点がわかるよう、英文と解説を板書する必要があると考える。
II	課題発見 解決方法	黒板の使用方法についての意見が多かった。黒板を使用した答え合わせにおいて、重要構文に下線を引くなどの工夫をすべきだと思った。

III	課題発見 解決方法	今回はパワーポイント（以下PPT）を使用した。PPTはその場で簡単に修正ができないため、間違いがないかどうかを事前に十分確認する必要があったが、やはり見逃しがあった。間違った部分は板書するなど、生徒が間違っても覚えやすいようにする必要がある。
-----	--------------	---

3つ目は「深化型」である（図13）。他の学生の模擬授業に参加してパワーポイントの有用性に気づき、自分の授業への導入を試みている。さらに、自らの授業実践に基づいた課題を発見し、次の授業での改善につなげている。3つの学期にまたがる模擬授業の体験において、継続的に一つの課題について省察し、活動を個々の目的意識的な「行為」に細分化して自己分析と自己評価ができている。メタ認知の深化として理想的なパターンと言える。

図13 深化型：課題発見→解決方法→新課題発見

I	課題発見 解決方法	他の学生の模擬授業を受けていてパワーポイント（以下PPT）の効果に気づいた。PPTを使った授業の方が生徒の興味関心を集めており、授業に積極的な姿勢を見せる生徒が多かった。次回からはPPTを積極的に取り入れたい。
II	解決方法 結果	PPTを使用し、黒板は使用しない授業に挑戦した。事前にPPTを作成することにより授業全体の見通しが立ち、進行がスムーズになった。授業内で焦った時でも、スライドを見て精神的に立て直すことができた。授業をするまでは気づかなかったが、生徒の視線を一点に集めることができ、授業を進めやすかった。しかし、PPTを使用した授業の時間配分に慣れていないため、活動時間が予定通りにいかなかった。
III	解決方法 結果 課題発見	今回の目標の一つは、全員に発言の機会を設けることであった。PPTの使用によって20分の短い時間で全員を指名することができたのは成長できた点だと思う。しかし、

	解決方法	答えがわからない生徒への対応について指摘されたので、生徒にプレッシャーを与えないようにしながらヒントを出して考えさせる指導を工夫していきたい。
--	------	---

振り返りレポートの質的分析の結果、3つの型の存在が明らかになったが、これらの型について模擬授業の成績で比較したところ非常に興味深い傾向が見られた。模擬授業の成績上位グループでは「深化型」が多用されていたのに対し、他のグループ（中位と下位）では「成長型」と「独立型」が混在し、「深化型」に分類される記述が全く見られなかったのである。この結果だけで単純に結論を導くことはできないが、振り返り記述に見られる一つの傾向として特筆すべき点であり、今後の指導への示唆を含んでいると言えるだろう。

6. おわりに

本論文の目的は、教職課程履修学生が自分の模擬授業についてまとめた振り返りレポートを分析し、今後の振り返り活動指導への知見を得ることであった。量的調査と質的調査の2種類の調査を実施し、さらにその結果を成績上位グループと下位グループでも比較した。

まずテキストマイニングを用いた量的調査では、2つのグループ間で大きな違いは見られなかった。ワードクラスターや共起ネットワークは、学生が自らの経験について概観することに対しては有効かもしれないが、その経験を次の模擬授業でどのように活かしていくかという点に関しての有用性は低いと思われる。言語の曖昧さの影響、すなわち言葉の前後関係を考慮して書き手の意図を分析することが困難だからである。しかしながら、この分析手法は、中学校や高等学校の生徒が授業内容をどのように理解しているかを把握するには大いに役立つのではないだろうか。データの全体像を統計的にかつ客観的に提示できるため、授業担当者として生徒の学習の状況や変容を把握し、次の授業に反映させることが容易になる。この意味で、教職課程履修中の学生がこの分析方法に慣れ

親しむことは貴重な経験になると思われる。

次に、質的内容分析を用いた質的調査では、記述内容において「成長型」「独立型」「深化型」の3つのパターンが存在することが分かり、模擬授業の評価が高いグループのみに「深化型」が見られることが明らかになった。

振り返りレポートを書くことは、模擬授業の課題を発見し、その改善方法を考え、課題解決に結びつけるという振り返りの内在化を促すことができる。しかしながら、メタ認知能力をさらに深化させるためには教員の積極的な支援が必要となる。そこで、今回の調査結果に基づき以下の3点を提案したい。

1) メタ認知を働かせることの良さに気づかせる

新学習指導要領では自律的な学びの実現には「見通し」と「振り返り」が重要だとされている。学習内容を振り返り、学習内容を自らとつなげて自己変容を自覚する振り返りの効果に気づかせることが大切である。教員は、実例を示しながら言語化して具体的に指導していくことが求められる。「模擬授業後に振り返りレポートを書くことで、具体的にどの項目がどういう理由で良くなったのかを自覚することができた」という記述に見られるような認知活動を促すことが大切である。

2) メタ認知は長期的に指導する必要がある

半年間の「英語科教育法」の授業で達成できることは限られている。「英語科教育法Ⅰ～Ⅳ」の2年間の授業を通じての長期的指導が肝要となる。そのためには、教職課程に携わる教員の共通認識と連携がますます重要となるだろう。

3) 新たな振り返りシートの策定

言語教師のための省察ツールである「言語教師のポートフォリオ」(J-POSTL)^{注5}では、指導技術の項目ごとに数字で変化を表す仕組みを導入している。振り返りにおいては、数字に加えて、各自の課題やテーマ別に、改善方法、結果、その理由という記述ができる振り返りシートを作成することを提案したい。学生は同じシートを卒業時まで継続して使用でき、自らの変化を確認できると同時に、メタ認知の深化を促す効果もあると考えられる。デジタル化して保存しておけば、自己分析も容易になるだろう。

本調査では分析対象者が少なく、模擬授業の成績別グループ間における差異が明確に示せなかった。また、質的分析についても仮説立てに留まるものであり、今後さらに対象者を増やして分析を続ける必要がある。新しい振り返りシートを用いた指導を始め、振り返り活動が実際の模擬授業の改善にどのような影響を及ぼすかという点についても継続的に観察していく必要があると思われる。

注

- 1 模擬授業の評価は、授業構成、授業内容（運営、学習言語への焦点など）、学習者の活動、教材の項目について指導者が評価し総合点を算出した。
- 2 テキストマイニングでは、与えられた文書の中でその単語がどれだけ特徴的であるかによってスコアが与えられる。その単語の出現回数に連動することが多いが、「言う」「思う」「考える」など、どのような種類の文書にも現れやすいような単語についてはスコアが低めになる。図5の例では、「生徒」の出現回数は72回でスコアは114.12と最も高く、「授業」の出現回数は87回と多いが、スコアは69.78となっているため、スコアに応じた大きさになっている。ワードクラウドでは、それぞれの単語のスコアに応じて単語の大きさが決まる。
- 3 この用語はMarryingによって1980年代に使用され始め、質的研究では広く用いられている分析方法である。広義では、コミュニケーションの言語メッセージに関する分析全般を指すとも考えることもできる。研究者によって大きく定義が異なり、テーマと同じ意味でパターンやカテゴリーをいう用語を用いることもある。この分析方法は、ある状況やそれを経験しているプロセスにいる対象者（本稿では英語教職履修課程の学生）の自由記述から、対象者がそのテキストに込めた意味や経験の解釈を探究するのに適している（竹内・水本、2012）。
- 4 目標となる文型や文法事項を反復練習した後で、文をさまざまに言い換えることにより、

目標の文型や文法事項を正確に表出できるようにする練習方法。

- 5 JACET教育問題研究会によって開発された、授業力自己評価記述文を含んだ振り返りのためのツールである。全7分野（1教育環境、2教授法、3教授資料の入手先、4授業計画、5授業実践、6自立学習、7評価）に関する記述文で計96項目に及ぶ。例えば授業内容に関する項目には、「言語や文化の関りを理解できるような活動を立案できる。」があり、5段階で継続的な自己評価を実施するように設計されている。英語教職課程の学生には96項目が、現役英語教師には115項目が用意されている。

参考文献

- 重松敬一・吉岡睦美 (2012) 「中学生のメタ認知育成のための振り返りシート活用の実践的研究」『奈良教育大学紀要』第61巻第1号（人文・社会）、121-133.
- 竹内理・水本篤 (2012) 『外国語教育研究ハンドブック：研究手法のより良い理解のために』松柏社、東京.
- 三宅なほみ (1997) 『インターネットの子どもたち—今ここに生きる子ども』岩波書店、東京.
- 三宅なほみ、白水始 (2002) 『内省』日本認知科学会（編）認知科学辞典、共立出版、東京.
- 文部科学省 (2012) 「新たな未来を築くための大学教育の質的変換に向けて—生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」中央教育審議会答申.
- 山本成代・白倉美里 (2018) 「学生のコメント分析から見たディクトグロスの有効性」言語教育エキスポ2018、口頭発表.
- 和栗百恵 (2010) 「『ふりかえり』と学習—大学教育におけるふりかえり支援のために—」『国立教育政策研究所紀要』第139集、85-100.
- Fink, L.D. (2013) *Creating Significant Learning Experiences – An integrated Approach to Designing College Courses*, San Francisco: Jossey-Bass.
- Moon, Jennifer (2004) *A Handbook of Reflective and*

Experiential Learning: Theory and Practice,
London: Routledge.

Nelson, T.O. (1996) Consciousness and meta-cognition. *American Psychologist*, 51, 102-116.

Schön, D.A. (1983) *The Reflective Practitioner: How Professionals think in action*. New York: Basic Books.

本稿には、国際文化表現学会2018東京研究会における口頭発表の一部が含まれている。